

9. 和歌山県新宮市からの実践報告

(1)新宮市教育委員会の取組

雑賀まどか (新宮市教育委員会 指導主事)

- 市民の防災に対する意識と防災教育のかたちが、この3年9ヶ月でめまぐるしく大きく変化しました。新宮市の子どもが変わり、大人も変わり地域の常識が変わりつつあります。もともと東日本大震災以前から新宮市民も地震津波に対しての意識は非常に高く、紀伊半島の地域でもいつか必ず地震は来るといわれ、備えをしてきました。また、毎年、台風の季節になると、大雨に備えるので、市民の方も「災害には慣れている」と考えていました。自然災害に対してはどうしたらよいかと考える機会はもともと多かった地域ではあります。
- 課題も多く、学校教育現場での備えの方向性や、避難訓練や町の防災に対する組織作りについては、いざというとき行動にうつせるかどうか、十分なものかどうかという疑問点も多くありました。3.11当日は、当時学校では、報道などで津波の様子を目の当たりにしながら、津波警報が発令されて子どもたちや地域の方々が学校へ避難してくることもあり、校舎に待機するなどの対応を迫られました。その後の甚大な被害の様子を様々なメディアで見聞きして衝撃を受けました。子どもたちも自分達に何ができるのか、これから何をすべきか重く受け止める姿が多く見られました。
- また、同年、9月4日は台風12号による豪雨で紀伊半島大水害を経験し、市内でも人の命に関わるような被害を受けました。ライフラインもストップし、被災による心への大きなショック・傷を負いました。
- しかし、そのとき、自分から手伝いをする子がでるなど、人の助けとなりたいと感じて行動した子たちがたくさんいました。
- 子どもも大人も一緒に考えて、「どうしたら生き抜けるか」、「どうやって助け合うか」、命の大切さを重く受け止め、釜石での取り組みを新宮市でも習い、一人の子どもの命も落とさないために取り組みを進めています。平成23年のあの時小学校6年生だった児童は今、中学校3年生です。金井先生にも授業していただき、3年目となります。



新宮市の紹介

- ・紀伊半島南東部に位置し、三重県、奈良県に接する
- ・人口 約3万人
- ・小学校5校、中学校5校

そら打つ波と、とりよろう山に
守られてここに平和の都市がある

新宮市章



2

新宮市民の意識 もともと

「いつか必ず地震がおこるんだって」

「津波がくるかもしれない」

「また、台風の季節だなあ」

▲自然災害の可能性と「備え」には慣れているつもり

▲「どうしたらよいか」は考える機会が多いけれど...
いざというときの行動に疑問もありました。

このままでいいのか？

4

H23年の被災で

新宮市民の意識も変化

「想定外とは？」

「自分たちに何ができるのか？」

「これから何をすべきか？」

◎行動を始める必要性

7

H24年度 新宮市の防災教育がスタート



金井先生の授業も
3年目(今年 中3)

子どもたちの
真剣な背中も成長
が見られます



- 9-12.学校では、3年にわたり積み重ねられた、いろいろな角度からの授業、パターンを変えた避難訓練を通じて、柔軟な対応ができるようになるための学習を続けています。子どもたちは自分の考えを大切にされる学習活動でいきいきとしています。自分の住む地域を良く知り、本当に知りたいことを探求し、足を運ぶことで気づいたことや、地域とのつながりが増えています。様々な疑問に、なるほど・そうかと納得し知識を深めながら、さらに日本各地の災害の様子と対策について、リアルタイムで学びとりながら成長しています。このような子どもたちの姿が変わった背景には、2つのかたちがあります。光に例えるとしたら、1つは子どもたちが小さなあかりを灯す波紋のようなかたち、もう1つはみんなの方向性を照らす目標の光です。
- 13.波紋のものと光を輝かせていたのは、子どもたちを教える学校の先生方の熱のこもった真剣な指導が背景にあったからです。学校全体で、教育課程に防災教育を位置づけ、どの先生も共通で、一生懸命に組織的に取り組む姿があります。家庭に子どもたちが話題を持ち帰り、動かすような働きかけをしています。
- 14.学習の様子は、保護者や地域の方々にも見てもらい参加いただき、大人を巻き込んだ防災教育を進めています。声もたくさんいただき、より実践的な取り組みへと改善されています。
- 15-16.また、避難訓練の参加や研修などでも、市・消防・警察・各自治組織など地域の取り組みが同時にされています。子どもを中心として地域学校間でも避難経路やマニュアル、マップ学習など、連携が飛躍的に進められてきました。真剣な目をする子どもたちの姿から、大人も最善を尽くす方向に進んできたことを実感しています。まだまだ途上ではありますが、このような町全体で取り組もうという盛り上がり連鎖を、子どもたちも感じとっているのではと思います。
- 17.もう1つの目標の光、それは平成24年度からの防災教育です。群馬大学にご指導いただきながら、また、他地域の取り組みからもいろいろ学びながら、方向性を探ってきました。
- 18.基本理念は、「姿勢の防災教育」です。災害に強い地域をつくる一員となる準備を進めています。子どもたちが大人になっても、学んだことを生かして、当たり前に行動し、

小・中では教材研究を重ね、
さまざまな柔軟な対応のための学習



9

てんでんこの意味を、体験で理解



10

子どもたちの真剣に取り組む姿



12

どの先生も一生懸命に教える姿



13

基本理念

『姿勢の防災教育』で

生き抜く力を育み、
災害に強い地域の文化をつくります。

さらに、防災教育の効果で
主体性のある「ひとづくり」

を目指します。

文化として継承されるのが目標の光です。この地域に住むお作法として、恵みと災害と両面で向き合い、先人の知恵や科学的知識をもとに、災いに備える主体的な姿勢を大切にしたいと考えています。そこからさらに生き抜く力を育みながら、別側面としての防災教育の効果、例えば人の命の大切さ、弱気者を守ること、ふるさとの良さ、自己肯定感や、人権尊重、学習への意欲のアップも期待して、自分で考え行動する主体性のある人づくりを目指しています。具体的な取り組みについては別紙の資料（資料 6-1-2）でお配りしています。変わってきたことには二重丸、見えてきたこと（課題）に三角のしるしをつけさせていただいています。年間5回の防災ワーキング会議で関係者が集まり情報交換や報告性を確認しているところです。今年度までに沿岸部のすべての小中学校で公開授業を行いました。また、山間部の学校でも同時に継続しながら、洪水や土砂災害を扱い、経験や心のケアを配慮しつつ、子どもたちが前向きに防災意識を高められるよう各校工夫して指導を行っています。やってみるといところから継続へつなげ、みんなで研究を進めて、自分の学校に合わせたカリキュラムを作って、地域へ発信することを今後も続けていきたいと考えています。今後も各学校では組織的にかつ熱を失わず、それぞれの先生方と子どもたちの真剣な防災学習の取り組みがいかに継続できるかということが課題です。

平成26年1月22日
 和歌山県新市教育委員会 学校教育課 校長 渡辺 功

【別紙資料】新市防災教育の経過

1. はじめに
 新市において

2. 新市防災教育 取り組みの経緯と現状

1013年	<p>【(高小中) 各校での防災関連の教育は、各校の中で進められ、多くは新市防災委員で完成や防災委員の協力で実現している。</p> <p>【(高小中)】【防災大綱】 (市・教職員) 防災教育の必要性をさらに促す 【(高小中)】 【(高小中)】 防災教育の必要性をさらに促す</p>
1023年	<p>【(高小中)】【防災大綱】 (市・教職員) 防災教育の必要性をさらに促す 【(高小中)】 【(高小中)】 防災教育の必要性をさらに促す</p>
1024年	<p>【(高小中)】【防災大綱】 (市・教職員) 防災教育の必要性をさらに促す 【(高小中)】 【(高小中)】 防災教育の必要性をさらに促す</p>
1025年	<p>【(高小中)】【防災大綱】 (市・教職員) 防災教育の必要性をさらに促す 【(高小中)】 【(高小中)】 防災教育の必要性をさらに促す</p>
1026年	<p>【(高小中)】【防災大綱】 (市・教職員) 防災教育の必要性をさらに促す 【(高小中)】 【(高小中)】 防災教育の必要性をさらに促す</p>

3. 王ヶ丘小学校の取り組みについて

4. 鎌倉中学校の取り組みについて